



伸ばす教育 潰す教育

『夢のある学校選びを』

みつばやし けいこ

学校説明会

私立校の受験生は、進路を決める時期がきた。各学校の入試説明会も本格的に始まっている。だいたいどの学校も、生徒・父母への学校説明会を3～4回行なっている。文化祭もほとんど開放されているし、楽しい体験入学を実施している。受験校については必ず学校説明会に参加して、入試日程はもちろん、受験願書の内容、受付開始日等を確認する必要がある。2校以上受験の場合には、受験日が重ならないよう調整して受験校を選ばなければならない。

私立の中学・高校では、各校で、「入試相談コーナー」が開かれて、個別に入



試に関する相談を受けつけている。受験する学校では、第一志望でなくても、出身校の成績や模擬テスト等の個人の成績等、情報を提示して、相談を受けるとよい。学校によっては入試相談を受けることで、優遇されることもある。

私立中学受験では、ほとんどが学校の調査書を必要としないので、出身の小学校側にも情報が乏しいから、受験者の受験校での入試相談が大切な学校選択の鍵となることが多い。私立校側も、特に第一志望の生徒の場合、入試相談で適性を見て、受験に有利な準備のヒントを伝えてくれる。

入試説明会に参加すると、学校説明と入試関連の資料が渡され、入学願書や過去問題の販売もしているので、ぜひ入手して、過去5年くらいの入試問題は解けるようにしておくこと本番で安心である。学校によっては、第一志望の生徒を優遇する意味で、歴年同類の問題を出題していることが多い。学校は、

ここでなければという生徒に、何とか入学してほしいと手を差しのべているはずである。

文化祭・体育祭に出かけよう

学校行事のなかでも文化祭は、在学生達がさまざまな工夫を凝らして、作品の展示会やコンサート、演劇などを披露し、模擬店を開いたりする。

教室の授業参観とは別の、在校生達の自由で独創的な活動を見ることがができる。また、教室やトイレなど、校舎の中を自由に見学できるので、施設設備を知るチャンスだ。

体育祭も別の面で在校生の活躍のようすを見ることができる。ただ、体育祭は一般公開しない場合もあるので、学校で確認する必要がある。

また、文化祭は2日間行なわれることが多いが一般公開の日を限定してい



運動強一の番次

る場合があるから、確認して出かける
とよい。

都立高校の改革

私立高校は近年、それぞれが改革を
重ね、新しい風を吹き込んできている
が、都立高校も自由な校風のあまり進
路指導が手薄だった従来のありかたに
批判の声もあって、学区制の枠を外す
と共に各学校の特色を強調し、個性化
の改革が進められている。

学校改革にともない、廃校になった
学校、新規にスタートした学校があっ
て、今年度、都立高校は全日制が203
校、定時制高校が101校ある。この数
は、生徒数の減少にあわせて減らして
いくそうだ。

従来の、進学対策が十分でないとい
う批判に答えて、進学指導重点校や進

学指導重点準備校を指定、進学を重視
する単位制高校に改変するなどして、
進学実績の向上を目指している。重点
指導校の実績ノウハウは他の高校にも
提供して、進学指導実績を上げていく
という。

特色ある学校

都立高校では、これまで何よりも生
徒の自主性を重んじ、私立校のような
厳しい校則もない学校が多い。私の子
ども達も希望して都立へ行ったが、一
人は入学の年度に制服ができたが、一
人は制服もなかった。アルバイトは自
由、最後の年度はバイク通学だった。部
活のあとにアルバイト先へ飛ばすのに
都合がよかったのだと思う。自由な学
校へ好んで入っていく場合には、自分
の個性にそって進路を選んでいく生徒

が集まるから、指定校推薦で難関有名
大の枠が来ていても、該当する成績の
人が見向きもしないという現象があっ
た。そういうことで、国立有名大の入学
人数などで比較されれば、都立高の進
学率は伸びていないと思う。好きな
コースを選んでいく場合には、自分の
学校からどこへ何人合格したなどとい
う進学率は、本人達には問題ではない。
ただ、難関大を目指す人に適切な受験
指導がなかったのであれば、それは、改
善されなければならないだろう。

卒業アルバムにのせた一文に、息子
は自分の学校のことを色で言えば無色
と書いていたが、理想的には、最初か
ら自分色であったほうが、もっと専門
で早熟に響きあえる仲間が集まって、
面白いかも知れない。

都立高校は、改革の一環として、進
路指導の充実のために、次のような、
特色ある新しいタイプの学校を準備し
ている。

- A. いろいろな科目が選択できる高校と
して、
 - (1) 単位制高校
 - (2) 進学重視型単位制高校
 - (3) 総合学科高校
- B. いろいろなタイプの専門学校
 - (1) 科学技術高校
 - (2) 進学型商業高校
 - (3) 総合芸術高校
 - (4) 単位制の専門学校
 - (5) 東京版デュアルシステム
一定期間企業で就業訓練を行
い、卒業後も役立つ技術・技能
を身につける。
 - (6) 産業高校
生産・流通システム全体を学
び、確かな職業観・専門的能
力を育てる。
- C. 中高一環教育校
- D. 昼夜間定時制高校
- E. チャレンジスクール
小学校や中学校での学校生活になじ



めなかつたり、自分の個性や能力を發揮できなかったけれど、自分の夢や目標に向かってもう一度はじめからチャレンジしたいという生徒を応援する。

F. トライネットスクール

自宅などでインターネットを使って勉強する通信制高校。月に2回程度は、スクーリングといって学校に通う。(17年度開校予定)

これに対して、都立高校の学費は、全日制で、入学金が5650円、授業料が年111600円となっている。定時制では、入学料が950円、授業料が年額30000円である。その他に、各学校で決めたPTA会費、積立金等がある。

授業料や入学金の納められない生徒には、授業料を減額、免除する制度がある。また、経済的理由により就学が困難な生徒には奨学金の制度もある。

中学・高校の学費

不況下、私立校での授業料滞納者が増えて、学校経営の悩みの種になっている。はじめから私立進学は、経済的に無理という家庭も多い。私立の中学・高校の入学時の1年度の学費は、それぞれの学校によるが、だいたい100万円前後である。

高校に併設された夜間定時制高校では、登校時間が5時からと決められていて、指導時間が十分取れず、それ以前の時間に施設を利用できないという不自由さがあるからだと言う。

午前や午後に通うことのできる定時制の独立校を作ることで、生徒が、午前、午後と自由に学ぶことができるようになるということだ。

不登校生の一つの進路として

今年、私の塾から、一人の不登校だった生徒が定時制高校へ進学した。小学校から不登校で、中学はほとんど行かなかったと言う。その後も、自宅に閉じこもっていて、ようやく塾へ通えるようになったのは17歳になってからだった。夏から通いはじめて、小学校4年生の学習から始めた。特に、算数が自信がないということで、小学4年生の中学受験用のテキストで始めた。英語

は教科書準拠のCD-ROMを買って、自宅である程度自習するようにして専ら算数・数学に力を入れた。その結果、非常に几帳面で、テキストをくまなくこなすので、力も自信もついて、意外に早く中学の数学に入れた。高校受験の自信もついて、いろいろ考えたけれど年齢で輪切りにされる学年にとけ込める自信がなくて、最初はインターネット・ハイスクールの体験学習をした。インターネット・ハイスクールのコーチングもよかったので、学習する中で、ネットでない友達がほしくなった。本人の意志、で、年齢差を気にしなくてよい定時制高校を選んで入学した。学校の始まる前の時間に塾へも熱心に来ているが最近は週3日のアルバイトもできるようになった。

学校の成績は、ほとんどの教科が90点台で、楽しそうだ。ただ、几帳面すぎて、レベル分けされた上級クラスの英語の授業では、先生が非常勤講師で、授業が終わるとすぐ帰られてしまうので、わ

夜間定時制高校

定時制高校については、夜間定時制を減らして昼夜間定時制の独立校を作ろうという動きがある。この理由は、現在、昼間働いて、夜でなければ高校に通えないという生徒が少なくなってきたこと。さらに、今のように、全日制

からないところが聞けないから、下のクラスに変えてもらったという。

都立高校では教師の異動もある。生徒と継続的に付き合うための職員の勤務形態や配置転換など考慮されるようになるという。ともあれ、長い不登校・引きこもりから解放されて、働くこともできるようになった。定時制高校が、昼夜間定時制独立校になっても、各地域に通いやすい数だけ確保してほしい。

不登校生が増える中、需要は多いはずだ。

夜間中学校の記録映画 「こんばんは」

やはり不登校で中学校教育を受けられず、夜間中学を卒業した人に薦められて、墨田区立文花中学校の、夜間学級の実録、長編記録映画「こんばん

は」を観た。こんなに近くに、すばらしい学級があることを初めて知った。

この映画は、山田洋次監督の映画、「学校」のモデル見城慶和先生が教壇に立つ、文花中学校の夜間学級の生活を実写した長編記録映画である。

見城慶和先生は、その40年に余る夜間学級の実践で吉川英治文化賞を受けられている。賞はこの映画制作の基金に当てられていると聞いた。

映画を撮った森康行監督は、夜間学級に関心をもって撮影にとりかかる1年前から教室に通い、生徒や先生と親しく同席して、お互いの理解を深めたと言う。夜間学級に通う生徒は、16歳から92歳まで、国籍も、日本はもちろん、中国、韓国、英語圏の人、とさまざま、何かの理由で中学へ通えなかった人達だ。中国語の話せる人、韓国・朝鮮語が母国語の人、英語の話せる人、在日の長い歴史の中で、みんな正しい日本語を学び、文章が日本語

で表現できるようになりたいと願っている。

授業は、いつも個々の人の生活と歴史を中心にすえて、話し合いで進められる。見城先生は、それぞれの人の生活の中で必要な日本語を、長い経験の中から選び出して、授業で使っている。それは、常用漢字とか教育漢字というような、血の通わないものではなく、そのように膨大な量のものでもない。

国語の授業で、何日もかけて宮澤賢治の作品が取り上げられていた。賢治を読むというより、賢治の言葉を個々の経験にひきよせて、自分と同化させていくといった個別の読み方を誘導されているため、みんながたえず考え、アイデアを出し合っているという緊張感と充実感がみなぎっている。

アラゴンのうたの一節に、「教えるとは希望を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」というのがある

そうだが、まさに、そういう授業である。

この学級では、生徒も先生も、学校が近づくと、走って校門をくぐる。みんなに会えるのがうれしくて、と言う。

生徒達が自分の言葉で日本語を書く。その中に、「学校に来て、こんばんは」というと、みんなの返事が返ってくる。その声を聞くと、今までの出米事がよい事も悪い事もみんな消えて、学校に来た喜びでいっぱいになってくる。」と、あった。

教育の原点を見せられた思いがした。昼間の学校も、みんなそうだったら、不登校の子は出ないだろう。夜間中学は全都で8校あるという。でも、一般に、どこにあるのか知られていない。光を当てて必要なところで学級起こしができるという。